令和4年度　坂井高等学校　学校評価書

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
学習支援	学習意欲を高め、生徒の主体性を引き出し、わかりやすく楽しい授業に向けた授業改善に取り組む。	生徒の授業満足度は前年度とほぼ同じで92%を超え、目標を上回った。 意欲的に学習に取り組んだ生徒は86.1%であり、前年度に比べ約2ポイント上昇した。特に、3年生が前年度2年次に比べ9ポイント上昇した。	今年度開始の新学習指導要領では、生徒の学習評価を授業改善につなげる取り組みが求められている。評価方法や改善につなげる手立てを教職員間で共有し、生徒の主体性を引き出す授業を実践する。
	タブレット端末の機能を有効に活用した授業の実践や研究を推進する。	ICT 機器を活用した授業改善に取り組む教職員は全体の 77.1%と目標を下回った。 出席停止となった生徒等に対し、タブレット端末を用いて授業配信を実施した。	授業での活用方法は、教科別に校内外で行われる研究授業や、校内の授業公開週間で相互に授業見学をしながら情報を収集する。教科・科目の特性に応じたタブレット端末の効果的な活用方法を研究し、授業改善に取り組む。
生徒支援	進んで挨拶する態度や身だしなみに気をつけ、礼儀正しく生活する態度を育成する。	礼儀正しい生活ができた生徒、ルールやマナーを守った生活ができた生徒、いずれも96%以上で、目標を大きく上回った。登校時の挨拶容儀指導や学年集会等での指導により、全体的には落ち着いた態度で学校生活を送っている。一部、規範意識が低く、度々指導を受ける生徒がみられた。	引き続き、教職員全体の共通理解のもとで、各部・学年会・コースが連携しながら組織的・継続的に生徒支援に取り組む。 観察、傾聴、共感を意識し生徒と関わることで生徒の自尊感情を育み、自律性と規範意識を高める。
	生徒の主体的活動や行事等への参加を促し、学校行事や生徒会活動を活性化する。	学校全体またはコース毎の行事等に積極的に取り組んだ生徒は95.7%で、前年度に続き目標を大きく上回った。コロナ禍でも感染防止対策を取りつつ、概ね行事を実施できたことで、生徒の積極性が高まった。 前年度後半から今年度前半にかけて生徒会が中心となって頭髪に関する校則の見直しを行った。	次年度5月には新型コロナウイルスの感染法上の分類が引き下げられる予定であり、適切な感染防止対策に取り組みながら生徒が主体的に活動できる機会を確保する。 校則の見直しや学校祭の企画・運営等、生徒会が中心となって、より主体的に活動に参加する機会を設定する。
進路支援	職業体験、企業見学、説明会、就職模試、個別面接等を通して、就職支援を強化する。	明確な進路目標を持ち、その実現に取り組めた生徒は昨年度を上回る 89.8%であった。進路情報に関する生徒評価は昨年度より約2ポイント上昇した。タブレット端末での求人票閲覧を可能とした。 約1割の保護者が、進路情報が適切ではない、と回答した。	コロナ禍前と同様の進路行事を可能な限り実施し、早い段階から企業情報を提供することで進路目標の明確化を図る。 保護者に対して確実に進路情報が伝わるよう複数の方法で周知する。
	ＰＵＴを活用した進学対策講座、個別添削等の充実を図り、進学支援を強化する。	３年間の見通し、計画的にＰＵＴを実施したことで、進学や資格取得の成果が高まった。昨年度に続き、複数の地元国公立大学合格者を輩出し、私学４大や専門学校等を含め、概ね希望通りに進学できた。	引き続き、ＰＵＴを柱として、進路指導部と関係教科・コースが連携し、一人ひとりの進路目標の実現に向けて指導の充実を図る。
安全教育	心身の健康状態を把握し、疾病を予防するとともに健康の管理ができるよう支援する。	適切な判断で保健室を利用したと答えた割合は昨年度とほぼ同様の 97%で目標を達成した。 昼食時の黙食指導に加え、部活動開始前後および活動中の感染防止対策に取り組んだ。4月から1月末までに本校関係者延べ305名が感染した。	次年度5月には新型コロナウイルスの感染法上の分類が引き下げられる予定であり、これを踏まえて適切な感染防止対策に取り組む。
	安全対策および防災教育等、防災体制の強化に努める 。	従来からの防災訓練、校内安全点検に加え、洪水による浸水被害から身を守る避難訓練や不審者対応の防犯訓練を実施した。	不測の事態が発生した際、適切に対応できるよう危機管理マニュアルの再確認を促す。

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
専門教科指導	実践的・体験的な学習を通して、職業人としての意識づけに努める。	専門教科の学習に積極的に取り組んだ生徒は97.8%で、前年度より約1ポイント上昇した。専門教科の学習や実習内容に満足と回答した保護者は約92%で、昨年度とほぼ同じ回答となった。	マイスター・ハイスクール事業を活用し、地域や地元企業等と連携しながら、より魅力のある専門学習を推進していく。さらに、課題研究を中心に、学科間の横断的な学びの充実にも取り組み、地域に貢献できる学びにつなげたい。
	資格試験や検定試験への取り組みを通して、進路意識の向上に努める。	資格・検定試験で1つ以上の資格を取得した生徒は73.8%で、目標は達成したが、前年度より約4ポイント低下した。特に、3年生は、昨年度同学年と比較し約10ポイント低下した。挑戦したが取得できなかった生徒が16.7%で、2年前と比較し約4ポイント低下した。	資格取得の意味・価値を生徒に伝え、取得への意欲が低下しないよう引き続き指導していく。また、社会で実践的に役立つ資格を取得できるように、指導体制、指導方法および個別指導の充実を図る。
教育相談	生徒理解を深め、個々の生徒にあった支援に積極的に取り組む。	年度始めに教育相談部が中心となり、生徒の特性に関する情報共有を行った。 生徒の特性に応じた支援を行うことに努めた教職員は90.4%で、前年度と比較し約4ポイント上昇した。	教育相談部を中心に、外部機関とも連携した支援体制の更なる強化を図る。 年々、生徒の多様化が顕著になり、柔軟な支援の需要性が高まっている。具体的かつ適切な支援活動を実践できるよう校内研修の充実を図る。
	抱えている問題に適切な方法で対処する力を育成する。	困ったことが生じたとき「適切に行動できた」「適切に行動できたことがあった」と回答した生徒の割合は昨年度をやや上回り96.1%で、目標を達成した。	引き続き、ロングホームや各種集会などを通じて、他者理解・自己理解を踏まえ円滑な人間関係が構築できるよう指導を行う。また、問題を一人で抱え込まず、周囲の信頼できる友人や大人等に相談できるようSOSの出し方教育にも取り組む。
主体的な諸活動	休養日の設定と主体的練習計画で、心身に充実した活動にする。	前年度と同様に約82%の生徒が、部活動の取り組みが充実していた、と回答しており目標を達成した。しかし、活動の中心となる3年生は7割に満たず、9割近い2年生と大きな開きが見られた。	次年度5月には新型コロナウイルスの感染法上の分類が引き下げられる予定であり、活動制限の緩和が期待される。 顧問は生徒と十分に意思疎通を図り、生徒が目標達成に向けて主体的に取り組めるように、外部人材の活用も含めて支援していく。
	図書館資料（本・新聞）の利用を通じて思いや考えを広げたり知識を深めたりしながら読書の楽しみを知る。	前年に比べ学校や自宅等で読書をする機会や読書の冊数が増えた生徒は38.3%で、前年度に比べ約3ポイント上昇したが目標は下回った。 図書館の本や廊下の新聞記事などの掲示物を見ている生徒は、前年度と同様に4割にとどまった。	引き続き、朝読書に取り組み、読書習慣の定着を図るとともに、読書の魅力を全生徒に発信し、図書室の利用促進につなげる。 報道機関への投げ込みを積極的に行い、新聞掲載の機会を増やし、記事の掲示を充実させることで生徒の関心を高める。
魅力発信	中学生やその保護者にわかりやすい広報ツールを開発する。	今年度からインスタグラムを通じて、コースの実習や部活動等の様子を発信した。 マイスター・ハイスクール事業の取り組みをまとめた通信を定期的に発行し、近隣中学校等を配布した。専門家の支援を受けマイスター・ハイスクールＰＲ動画も作成した。	引き続き、中学校での学校説明会等の機会を利用して、学校ホームページ上の紹介動画の周知を行う。今年度撮影したマイスター・ハイスクール事業のＰＲ動画も活用し、通信の発行と合わせて魅力発信に努める。
	コースの専門性を生かした地域課題解決の研究を通して地域貢献を進める。	マイスター・ハイスクール事業を活用した地域貢献活動として、地元農家と連携したアプリ開発、地元行政等と連携したふるさと納税返礼品の開発、地元団体と連携した地域観光資源の魅力向上等に取り組んだ。 １２月には地元中学生を招いて、これらの研究成果を発表した。	次年度はマイスター・ハイスクール事業最終年であり、地域や地元産業界と連携した課題研究を深化させ、地域貢献活動の充実を図りながら次世代の産業人材育成を目指していく。